

2009年10月24日 民主党本部に竜代表が鈴木大臣を訪問して

(竜) どうも先生、こんにちは

(鈴) こんにちは

(竜) この度は文科省の副大臣御就任おめでとうございます。

(鈴) ありがとうございます

(竜) 本当は私たちは先生に厚労省に行っていたいただきたいと思っていました。それくらい先生は医療崩壊のことについて色々お考えを出していただいて、造詣も深い。現実として医療崩壊というのを認めない人たちもいると思うんですが、いかがですかね。

(鈴) あの…まだ認めない方が！

(竜) まだ認めない方が（笑）、いないかもしれませんけども。

(鈴) いらっしゃるんですよ。ビックリしているんですけども。もっとも現場の声を聞くことをやっていかなきゃいけないとつくづく感じましたね。結局これまでも、もう医療現場の方々は本当にお忙しすぎて、夜中まで病院にいらっしゃるので、夜中まで病院にいるということ自体が、もう、「世の中に発信をする余力すらない」という状況だったんですけども。まあ、そのことは少しずつ竜先生たちの勇気あるご活動で、我々に実態を知らせていただくことになってきました。しかし今度は我々の仕事だと思いますが、そのことをもっともって大勢の国民の皆さんに、あるいは国会議員でもまだまだやはり認識にかなり差がありますから、そうしたことを一生懸命やっていかなければいけないなと思っています。

(竜) ありがとうございます。千葉で具体的な行動が中々起こってこないのは、医療崩壊は我々医者が努力してればまだ大丈夫なんじゃないかと思われているようで、それで何もされてないために、更に私たちの疲弊が深まっているんだと思いますけどね。

(鈴) 私は、勤務医の方々は我慢しすぎる患者さんと似ているといつも申し上げているんです。痛いのに「痛くない」という患者さんは困りますよね？

(竜) そうですね。まあ私たちも正に意地っ張り、意地で仕事をしているので。それも楽しいからまた意地を張りながら仕事をしているんですけども、そろそろ限界に近付いてきてるかなという感じがするんですね。

(鈴) そうでないとの確な診断ができませんし、痛い時は痛い。辛い時は辛い。言っていた方が、早め早めの早期発見・早期治療につながるんですが、そういう意味ではやはり医療現場がここまで深刻になっている、そのことの兆候が発せられなかった。あるいは、そのことに気がつかなかったことが、今の医療崩壊の深刻さにつながっているわけですから、やっぱりここから治していかないといけないです

ね。ありのままの今の現場の状況をリアルタイムで社会全体が共有をして、そしてそれに対して適切な措置をとっていくという流れがこれからできていくといいですね。

(竜) そうですね。こうなっちゃった基本はやっぱり、医療費亡国論というのがあって、これ以上医療費かけたら国の経済が崩壊するといったところで、人口が増えているにも関わらず、医師を抑制したというところにあると思うんですが、国の方針としてそのようなところはどのように手直しをして……？

(鈴) 今まで、医療費っていうものを社会のコストとしてしか考えてこなかったことが間違いなんですね。まあそれは勿論、支出にはなっているわけですけども、ある意味ではこれは正に付加価値になっているわけですし、このことによって雇用も生まれているわけでありまして、経済も生まれているわけですね。ですからそういう意味では、私たちは医療という分野はこれからの重大な雇用創出チャンスであり、成長のチャンスであると思っています。とりわけ、アジア共同体ということを私たちは言っていますけども、アジアの人たちが一番望んでいるのは、日本の高い医療水準とそれを担う人材であり、その技術であり、あるいはそうした機器でありと。医療というのはですね、ヒューマンウェアとソフトウェアとハードウェアと、正に全てが含まれたソーシャルサービスですから。そしてこれはですね、何か市場を席卷するとか、そういう話ではなくて、正に日本の医療がアジアに広がれば、アジアの人たちも喜ぶと。という意味で、私も医療人材の育成に責任を負う立場になったわけですが、これからは正にそういう日本の国が、経済大国ということではなくて、より高次元で世界の国々から必要とされる国になっていくというためにも、その友愛外交のコンセプトを一番具体的にわかりやすく実現していくという観点でも、医療というものは重要だと思っています。

(竜) ありがとうございます。私たちは自分たちの行っている医療に対しては自信があるんですね。世界一の医療を行っていると思っているんですけど。ただ国民に対して説明とかそういうのが少し下手だったというだけであって、医療の内容はアメリカにもどこにも負けないものであると。これをあまねく世界の人に提供するということが、人類の健康福祉の増進にも寄与できるし、ひいては日本経済にとっても大きな貢献ができると思いますね。

(鈴) そう思いますね。まずは千葉県民の医療を整えていただくというのが第一義ですが、その次には、正に成田空港に世界中から日本の医療を受けたいという人達が集まってきて、そして成田空港を抱える千葉県で、そういった人たちを受け入れて、そして元気になって帰っていただくと。こういうポテンシャルもですね、千葉県は十分に秘めていると思いますね。

(竜) そうですね、確かに。

(鈴) 中期的にはそちらの方もお願いしたいと。

(竜) 国のグランドデザインの中で医療ということが大きな一つの柱になるという事をおっしゃっていただいたと理解してよろしいですかね。

(鈴) はい、ええ。そういう風に思います。

(竜) ありがとうございます。あともう一つ、医師不足なんですけれども、大学の医師の定員を増やしていただけるというのは民主党のマニフェストの方にありましたけれども、具体的にはどのような風にやっていただけるのでしょうか。

(鈴) これは、医師養成数というものをやはり着々と増やしていかなければいけないと思います。まずそもそも、人口 1000 人あたりの医師数は 2 人ですよ。千葉県はもっと少ない。

(竜) 少ない。ビリから 2 番目ですから(笑)

(鈴) ですが、これ OECD 平均で 3 人です。高齢化率が同じドイツは 1000 人に 3.4 人いますから、千葉県民とドイツ人で比べると人口あたり大体 2 倍以上ドイツにはお医者さんがいるということですから、先進国の水準からすると千葉の方々っていうのは 1/2 から 1/3 の医療過疎の中で暮しておられるということなんです。したがって、これは非常に重要な課題でありますので、一生懸命取り組んでいかなきゃいけないという風に思っています。ただまあ、お医者さんというのは養成するのに 10 年ぐらいやっぱり。

(竜) そうですね。

(鈴) 一人前になるにはかかりますから、この 10 年間でどう乗り切っていくかっていうこともあわせて考えていかなきゃいけない。そういう意味では、今日は色んなジャンルの医療関係者が御集まりだと思いますが、これからはやっぱりチームで医療をしていくということだと思いますね。ですからドクターも大事ですけども、メディカル、あるいはそれを支える事務スタッフの方々……全体としてのチームで最大のパフォーマンスをあげていただくという中で、お医者さんにはお医者さんにしかできない仕事に集中をしてもらってですね。正に業務分担と、そしてコラボレーションというものをやっていかなきゃいけないと。そういうことで申し上げますと、医療チームの人材を強化するための……野球で言うと補強費。人材補強費といったことを、政策としては考えていかなきゃいけないんじゃないかなという風に考えています。それと、医学部で申し上げますとですね、やはり医者を増やすためには教員を……

(竜) そうなんです。そうなんです、はい。

(鈴) 増やさなければいけないということで、これは、私が就任して一番最初に指示したことは、教員の方々をきちっと増やすようにということでした。徐々にではあります。もう既に今年度からそういう方向になっておりますので。是非そうしたことも上手く活用していただいたらありがたいかなと思います。

(竜) 非常にありがたいですが、ずっとですね、大学の教員数が減らされておりますので、

その中で医学部の学生だけ増えるとさらに大学病院の負担が増えると。先生はこの問題もちゃんと認識されておられますので、非常に心強く思いました。あともう一つ私たち、やろうと思っていることは、チームっていうのが病院同士のチーム連携……役割分担をやって病院同士が機能連携をして結果的に一つの大きな医療をみんな提供する体制を作っていきたいという風に考えております。

(鈴) 本当におっしゃる通りで、なかなか集約化といっても患者さんのことを考えると難しい。そういう意味ではやはり正に連携ですよ。本当に限られた医療人材でいかに的確に地域の方々に貢献できるかと。正にそこはマネージメント、プロデュースの問題だと思います。そういった所を今度色々構想されるんだと思いますので、期待しています。

(竜) 患者さんや、現場で働く看護師さんや色々な医療従事者の意見をいれて、その意見を元に、少し「こうやって欲しい」と。今までお上の言われたことをそのままやってきたんですね。その60年の中で医療崩壊してきましたんで、今こそ現場の意見を幅広く拾い集めて、それを政治に反映させてほしいと強く念願している次第です。

(鈴) おっしゃる通りですね。60年ぶりに、色んな制度が変わっていきます。その中で医療制度も教育制度も変わる言わば大チャンスなんです。60年前は、日本が正に高度成長をこれからしようと。人口も非常に若者中心の構成でした。もう前提が抜本的に変わってるわけですから。その前提が変わったということが一番実感できないのが中央なんですね。ですから、やはり新しい改革というのは、現場の皆さんが一番やりやすいように、そして現場の皆さんが一番知恵を持っておられるわけですから、そのご提案というのを我々は最大限尊重していくということがとても大事だと思っておりますのでよろしくお願ひしたいと思います。

(竜) ありがとうございます。力強いお言葉をいただきまして、本当にありがたく思います。私たち医療現場に働く者は、患者さんの声も集めて本当に必要な医療を政策提案して、政治で実現していただきたいと念願しておりますので。先生、今後ともひとつどうぞよろしくお願ひします。

(鈴) よろしくお願ひします。

(竜) 本日はありがとうございます。